

## 1.再び人生のフォーカスを神に置き換える

前回我々の罪を贖うために十字架につけられ死なれ、三日目によみがえられたイエス様は天にのぼって行かれる前までの40日の間、弟子たちと会って、話されました。どんな話をされたのでしょうか。

使徒の働き1章3節で「**イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。(3節)**」と書かれています。なぜでしょうか。

イエス様はいつまでも弟子たちと一緒にではなく、まもなく天に昇られるからであり、残された弟子たちがイエス様のなされた働きを代わりに続けなければならなかったからです。

イエス様が弟子たちに語られた内容は「**イエスは確かに蘇られた**」ことと「**神の国のこと**」についてでした。

つまり、イエス様の関心事はこの世ではなく、**神の国**だったので、私たちも**神の国**について関心をもつべきであるという意味です。

そして1章8節、イエス・キリストが天にのぼって行かれる前に、最後に弟子たちにこう言われます。

「**しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。**」

この御言葉によって分かる大切な核心はなんなのでしょうか。我々には**力**(デユナミス)が必要とされているが、その力の源は**聖霊の神様**によるであるということです。つまり、世の**政治、自分の利益などを計りながら周りの人々や、環境に関心をもって****いた弟子たちに**イエス様は今あなたがたの人生のフォーカスを神に置き換え、合わせなさいと命じられた意味であります。

神様の力を受けるためには人や環境ではなく、ただ聖霊に頼らなければなりません。神様に焦点を合わせることは、神の御言葉と祈りしか出来ません。そういうわけで、我々は神様の御言葉にいつもとどまるべきであり、いつも祈りの座から離れてはいけません。

ところが、**聖霊が我々に宿っておられるのになぜその力が現されないのでしょうか。**一言で言うと自分が従わないからです。たとえば、アパートに住んでいる方がエレベータの中で信じていない隣人に会ったとき、みなさんの心には「イエス様の事を言おうか?」という思いが生じるときもあるでしょう。それと同時に心のどこかでは「いや、余計に話を持ち出したらいやがるといけないんじゃないか」という思いもあるでしょう。この二つの思いの中で悩んでいるうちにエレベータの扉が開きます。すると「あ、良かった。さようなら」と言いませんか。確かなのは信じていない人に会った時に、心に「福音を伝えよう、分かち合おう」という思いは、聖霊が私たちに教えてくださったことです。なのに、我々はそれにすぐ従わず、ためらっているうちに時間が過ぎます。そういうわけで聖霊の力は当然発揮されなくなるのです。

たとえば、発電所から電気を私たちの家まで流しています。しかし、発電所がどんなに立派で、たくさんの電気を流したとしても我々がスイッチをオンにしなければ、電灯(でんとう)はつけられません。同じように聖霊が我々とともにおられますが、我々が従順というスイッチをつけなければ聖霊は我々の中では働けません。ですから、今も我々が御言葉に従えば、聖霊はみなさんを通して、すばらしい御業が行われ、用いられると信じます。大切なのは御言葉に従えば、聖霊のすばらしい力を体験することができます。ですから、日々まず、我々もよく神の御言葉と聖霊に従う心を持って、**聖霊充滿、聖霊満たし**を私たちは日々から祈り求めなければなりません。聖霊の満たし、聖霊の充滿というのは、聖霊の神様がただ、自分に内住されてすこしずつ働かれることではありません。我々に満ち溢れるほど満たされることを意味します。自分の考え、自分の言葉と行動、自分のすべての領域において神の力と知恵、恵みで満たされることを意味します。聖霊に満たされると我々のすべての言葉や考え、行動を通して御霊のすばらしい力が表され、恵みを与え、御霊のすばらしい実が表されると信じます。

**イエス様の弟子たちもエルサレムの奥まった部屋で少なくとも10日間ほど集中して祈り続けられた**と思います。

いつ約束された聖霊の神様が臨まれるのか確約(かくやく)されてない状況で、神の約束が、祈りが答えられるまで、ただ神様だけに頼り、みあげて、集中的に祈り続けたのです! 私たちもさわがせている心、乱れている心をつかんで神様に集中し、聖霊の満たしを望み、求める時に神様の恵みと力を経験されると信じます。

ある人たちは困った時、周りの人々に訴えます。人々をつかんで哀訴(あいそ)し、訴えることで答えられるのでしょうか。ある方は居酒屋に行ってアルコールに訴えるなんて何が変わり、良いのでしょうか。酒代だけが高くなる一方でしょう。我々が訴えられる、歌えるべきところは、全能なる神様に叫び、切に求めるときこそ、今も生きておられ、すべてをご存じであり、全能なる御力を持っておられる神の答えと解決を得ることが出来ると信じます。

「**わたしを呼べ。そうすれば、わたしはあなたに答え、あなたの知らない理解を越えた大いなることを、あなたに告げよう。(エレミヤ書33:3)**」

もう一度みなさんの人生の色々な焦点を神様に合わせて見ませんか。自分の周りやほかの人々、自分に合わせないで、今悩み、抱えている問題に焦点を合わせないで、神様に合わせる時こそ、ようやくみなさんは神様の力を得て、根本的な問題が解決策と答えられる恵みをいただけると信じます。アーメン!

本文の**8節**をもう一度読んで見ましょう。「**しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そし**

**て、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」**

エルサレムから福音化が始まります。**使徒の働き1章-7章**まではエルサレムでどうやって福音が伝えられ、ついにエルサレムの教会が立てられたのかよく表しています。エルサレムの福音化の後、次の2段階として「**ユダヤとサマリア全土**」の福音化となります。**使徒の働き8章1節から11章18節**までの内容です。

その次はどこまでですか。「**地のはてにまで**」です。地の果てまで福音が宣べ伝えられると言われました。

これは**使徒の働き11章19節から何章まで**でしょうか。その終わりはまだありません。つまり、**使徒の働きは28章で終わらないで、いまなおイエスキリストの救いの福音は地の果てにまで続いているから**です！

**主イエス・キリストが再臨されるその日の時こそ、使徒の働きの最後の章になるでしょう！**ですから、**使徒の働きからはじめ、地の果てにまで福音が届けられるその日まで、神様の国のことは決して中断されないと信じます。**

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！

**イエス様は弟子たちにたくさんのことをするように命じたわけではありません。**神の国のためにたくさんのことを計画して、たくさん働くべきであると言われていません。ただ、**エルサレムとユダヤとサマリア全土、地の果てにまで私の証人となりなさい**と言われました。

**どんな意味でしょうか。**イエス様はまず、弟子たちがいる自分の近いところから伝えることを進めました。

**弟子たちにおいてエルサレムとユダヤは近いところ**でした。しかし、決して身近なところだけでとどまってはいけないことを教えて下さったのです。

イスラエル人でも、ほかの民族にでも関係なく、さらに敵対しているいやな人々にさえも**差別しないで、福音を伝えるようにと命じられたのです。**サマリア地域は、**イスラエル人にとっても一番いやな地域と人々**でした。

この意味は、しかし、**イエス様は福音を伝える対象を自分で制限しないで、差別しないようにと気を配ってください**ました。

そして、**地の果てにまで福音を伝える**ようにと命じられました。なぜイエスキリストの福音を地の果てにまで伝えるように命じられたのでしょうか。

**この世においてこのイエス・キリストによらなくては、人は自力(じりき)で救われる人はだれもいないから**です。

**もちろん、この主の命令は、自分の生活、仕事、やるべきことをすべてないがしろにして、後回しにして伝道と宣教だけしなさい**ということでは決してありません！

我々にまかされているすべてのことにおいて、**我々の使命、我々の人生の目的がイエス・キリストという福音の証人となること**であることを教えて下っています。クリスチャンがほかの人より、熱心に、誠実に働くべき目的が、**学生が信じてない学生たちよりもっと熱心に勉強すべき目的が、頑張ってお金を稼ぐべき目的がほかの人を助け、仕えること、我々のすべての奉仕と仕えるべき目的が神に栄光を帰し、イエス・キリストを証人として伝えるため**であることを意味し、教えてくださっています。

イエス様が弟子たちに最後に残した言葉というのは“わたしの証人となる”ことでした。

ここで“証人”という言葉は法的な用語として“**法廷に出て自分が見て、聞いた事実を話す人**”です。

証人は沈黙してはいけないし、うそをついてもいけない、ただ自分が見て聞いたことを話す義務があります。それにイエス様は我々に証人となるようにと言われましたが、我々が話すべき真実とは何でしょうか。それは“**イエス様は聖書の予言のとおり**にこの世にお生まれ、私たちの罪を贖うために十字架につけられ、三日目によみがえられました。そのイエス様はこの世を裁くためにふたたび来られます。そのイエス様を信じれば救われます。”です。

**なぜ我々は聖霊の神を慕い求め、聖霊の満たしを日々切に求めるべきでしょうか。**

まず、聖霊がなければ何一つ成し遂げられないからです。

創造の働きにおいても聖霊の神様が共におられました(創世記1:2)。父なる神様は私たちに与えられた最高の贈り物は聖霊であり、それは私たちを最もよく助けてくださる方が聖霊だからです(**ルカ11:13後半「天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えて下さいます。」**)

**マタイの福音書1章18節「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。」**には、イエス様がこの世に来られるとき、聖霊によって胎を宿されたと記されています。また、私たちの救いに関しても、**ヨハネの福音書3章5節に「水と霊によって生まれなければならない」とあるように、聖霊の働きがなければ、誰一人神の救いを受けることができません。**

イエス様の公生涯も聖霊によって始まりました。**マタイの福音書3章16節**では、イエス様が洗礼を受けたとき、**神の御霊が鳩のようにイエスキリストの上に注がれた**と述べられています。**使徒の働き10章38節**には、「**神はこのイエスに聖霊と力によって油注がれ**」、働きを始められたと書かれています。

教会の始まりも聖霊によるものでした(使徒の働き2章)。また、使徒の働き13章では、**宣教も聖霊のアイデア**であり、アンテيوخ教会の計画ではなく、**聖霊の導き**であったことが明らかにされています。そして、さらに、**聖書全体は聖霊の靈感**によって書かれたとされ(テモテへの手紙第二3章16節)、**聖霊がなければ聖書も存在しなかった**でしょう。

ですから、**聖霊なしでは何一つ成し遂げられません。**同じように、我らの人生にも、生活にも、自身の頭、思い、感情、自力ではなく、**聖霊の神の助けと力を日々頂けるために、日々、聖霊の満たしを、力を求めなければ、神様からの自分に与えられている人生の使命と責任を果たすことができないことを是非忘れないでください。**

## 2. イエスキリストから頂いた使命に力を尽くす

よみがえられたイエス・キリストを信じる全ての人々、弟子たちに、新しい尊い使命を与えて下さってから、主イエス・キリストは天にあげられました！（イエス・キリストの昇天）

本文の9節に「こう言うてから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。」

イエス様は弟子たちに新しい使命を与えて父なる神様がおられるところにみなが見ている間上げられます。上げられるイエス様は雲に包まれて、見えなくなられたと書かれています。

ここで“雲”というのは自然現象としての雲だったのか、神様の特別な摂理としての雲だったのか正確には分かりません。

しかし、旧約聖書において雲というのは、神様の栄光と臨在を象徴しました。

たとえば、出エジプト記19章16節「三日目の朝になると、雷鳴(らいめい)と稲妻(いなずま)と厚い雲が山の上にあつて、角笛(つのぶえ)の音が非常に高く鳴(な)り響(ひび)いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」

神様がシナイ山に臨まれたとき、厚い雲の中で臨まれたと記されています。

歴代誌第二章13節ではソロモン王が聖殿の建築を終え契約の箱を聖殿に移った後、神様に賛美をささげた時に聖書はこう記されています。「そのとき、雲がその宮、すなわち主の宮に満ちた。」と書かれています。これは神様が臨在される栄光の姿を雲で表しました。

新約聖書では、イエス様はペテロとヤコブとヨハネが高い山に登られた時、光(ひか)り輝く雲が人々を包み(マタイ17:5、マルコ9:7、ルカ9:34-35)、そして、イエス様が再び再臨される時にも、雲に乗って来られると予言されました。(マタイ24:30、マルコ13:26)

\*マタイの福音書24:30「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」

\*マルコの福音書13:26「そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます。」

ですから、本文の雲も神様の栄光と臨在を表しているのだと理解すれば良いと思います。

大切なのは神様が再び臨在される時に、光り輝く雲が表されるように、みなさんの日々の生活において、いつも毎週の礼拝においても神様の栄光と御臨在の雲に包まれますように心からお祈り申し上げます。

そして、本文10-11節に主イエスキリストが必ず再び来られることについてこう書かれています。

「10イエスが上(のぼ)って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。11そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上(あ)げられたこのイエスは、天に上(のぼ)って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、また おいでになります。」」  
イエス様の十字架の死も、イエス様の復活もイエス様の弟子たちにとっては本当にショックだったと思いますが、復活されたイエス・キリストが自分たちの目の前で天に上げられる姿を見ながら、どんな心境だったでしょうか。

きっとショックで、あぜんと立ち尽くすしかなかったと思います。自分たちが今まで仕えて来た方が真の神様であったことを確認された時のその気持ちは感激そのものだったのではないかと思います。しかし、ただ天を見上げてぼっとしている弟子たちに御使いが「どうして(ずっとぼっと)天を見上げて立っているのですか」と指摘しました！

弟子たちはよみがえられたイエス様に再び出会った時、ようやくイエス様がイスラエルの王となられ、ローマの殖民から自分たちを救ってくださると期待していたかも知れませんが、ところが、イエス様は自分たちの期待とはまったく応じてくださらず、昇天されてしまったので、なんだか複雑な気持ちでずっと天を見上げていた弟子たちもいたと思わされます。

「どうして(ずっとぼっと)天を見上げて立っているのですか」これは弟子たちが持つべき関心事は“イスラエル国の回復”ではなく、イエス様から命じられた新しい尊い使命つまり、聖霊に満たされ地の果てまでイエスキリストの救いの福音を伝えることである意味です。

あなたがたがやることは、いっぱいあるのになぜここでずっとぼっとしているのかという意味でした。

ですから、ほかの言い方で言い換えれば、「あなたがたに任せられた使命のところに戻りなさい。」

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!大切なのは、我々はみなイエス様から任せられた使命の場があります。主婦は家庭のことをしっかりする使命があります。職場の人々は職場で任された働きを誠実に、学生は勉強をしっかりと、自分の生活の領域においてキリストを証し、クリスチャンらしく生きる使命があるのです。

## 3. 再び来られるイエスキリストを待ち望む

「11そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上(あ)げられたこのイエスは、天に上(のぼ)って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」」

「このイエスは、天に上(のぼ)って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」と言われました。

みなさん、みなさんはこのイエスキリストの再臨の御言葉を信じますか。

みなさん、どうしてイエス様はふたたび来られるのですか。

聖書には、主イエスキリストが再び来られる時は、人々がこの世でどのように生きたのか裁かれるために来られると教えられています。

**第二コリント人への手紙5章10節**「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、**キリストのさばきの座の前に現れなければならない**のです。」

もし、イエス様がふたたび来られて人々の善悪の行いの報いとさばきをされないなら、神は本当に正義なるお方ではなく、不公平で、我々には悔しいことがあまりにも多いのではないのでしょうか。しかし、神様は義なるお方ですので、かならず、公平に、正しく裁かれると信じます！

すると、イエス様はいつふたたび来られますか。

**マルコの福音書13章32節**に「**ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。父だけが知っておられます。**」とイエス様は言われました。また、**テサロニケ人への手紙第一5章2節**に「**主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身がよく知っているからです。**」と言われました。

みなさん！盗人が予め、予告して来ないのと同じように、イエス様の再臨も突然されるということなので、**いつも再び来られるイエスキリストを迎える準備をし、待たなければなりません。**

これを言い換えると、**神の国と福音を証することのために伝え、仕える機会はいつもあるわけではないので、機会のあるかぎり仕え、献身するようにと求められている意味だ**と思います。

**再び来られるイエス様はどのように来られますか？**本文の11節に「**このイエスは、天に上(のぼ)って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。**」

聖書では「**イエスキリストは栄光の中で、すべての人々が見ている中で再び来られる**」という意味です。

\***マタイの福音書25章31—32節**「**人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座につきま**す。32そして、**すべての国の人々が御前に集められます**。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、」

\***テサロニケ人への手紙第一4章16節**「**すなわち、号令(こうれい)と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。**」

\***マルコの福音書13章26節**「**そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光をともに来るのを見ます。**」

\***ヨハネの黙示録1章7節**「**見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る**。彼を突き刺した者たちさえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかし、アーメン。」

今日多くの新興宗教とカルトの異端の教主(きょうしゅ)たちは自分たちが再臨のイエスと言い、イエスがこの世に生まれたとき、迫害を受けたように自分も迫害を受けるのだと言います。しかし、再び来られるイエス様は迫害を受けるために来られるわけではないので、軟弱な人間の姿ではなく、**栄光と力に満ちた裁き主で裁きのために来られます**。

初めて平和の王、救い主として来られたイエス様は馬小屋の飼い葉桶という一番低いところ、みすばらしく来られましたが、再び来られるイエス・キリストは栄光の中で全てが見ている中で来られるとのこと。

**イエス様の再臨というのはどこかのすみっこではなく、何人かの少数だけにではなく、この地球にいるすべての人々だけのみならず、すでに死んだ者もみな生き返って、みなが見ている中で来られるということ**です。

**マタイの福音書24章5節**では「**わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わします。**」と

いってイエス様の再臨についてかならず、偽りの者が現され、多くの人々を惑わすあらかじめ教えてくださっているのです。とつても残念なのは異端研究所の資料によると統一教のムンソンミョンを含め、新天地など、自称再臨のイエスだと言っている人が70人も超えているのだそうです。一言で言うと彼らはみな偽り者です。

なぜなら、彼らが生まれるとき、イエス様が昇天されるときように雲に乗っても来なかったし、我々が彼がこの来たことを見てもいないからです。ですから、イエス様の再臨の時が近づいてこればくるほど、このような異端がもっと増えるはずなので、惑わされないように目覚めて祈り、気をつけなければなりません。

聖書にはイエス様の再臨について1,560回も予言されていますので、必ず実現され、その時が来ると信じます。イエス様の再臨はかならず、されるでしょう。来週日曜日から、地上全ての主の教会はクリスマスまでの四週間をアドベントと呼ばれ、我々の為に来られた救い主イエス様を覚え感謝を持って待ち望む時期となります。実はアドベントという言葉には**過去・現在・未来への深い意味**が含まれています。

アドベント(Advent)は「来る」「到着」を意味するラテン語「adventus」から由来した言葉です。これは2024年前、実際この世に救い主としてイエスキリストがお生まれになり、**実際来られた御誕生を祝う意味**です。そして、一度「**来られた**」神の御子救い主イエスキリストが将来再び来られると言う再臨(マタイ24:36)の聖書の御約束通りに必ず「**再び来られる**」主を待ち望む時の意味もアドベントには含まれています。その為、アドベントは再び来られる主を待ち望む時として、**待降節(たいこうせつ)**、**待臨節(たいりんせつ)**、**降臨節(こうりんせつ)**だとも呼ばれています。そしてアドベントには**現在の意味**も含まれています。つまり、2024年前だけではなく、「**今現在にも信じる全ての人々に来られ共におられる**」イエス・キリストの意味も含まれているのです。**今もイエス・キリストを受け入れ信じる全ての人々のうちに来られ、いつも共におられる「インマヌエル(我らと共におられる神)」**という意味も含まれているのです。今年も来週から始まり、クリスマスの主日までアドベント4週間!日々我らと共におられるインマヌエルの主イエスキリストに感謝と賛美を捧げ、主の御言葉と祈りを持って日々交わり、聖霊の神の満たしを切に求めつつ、再び来られる主を心から待ち望むクリスチャンプレイズチャーチの全神の家族となりますように心からお祈り申し上げます!アーメン!